

# たくみ

## Craftsmanship

特集 韓国の民藝展

第26号

### シルクロード美術館と

### アジアの染織品のこと

先年のインド洋岸諸国を襲った海中地震と大津波の、災禍の復興もままならぬなか、先々月にはインドネシアのジャワ島周辺で大地震が起きた。

この国では前回のときもスマトラ島の、とくに北部のアチエ地方で大津波による壊滅的な被害があつて、人々の伝統文化の喪失も懸念されている。

このたびもジャワ島に古くから栄えた王朝の都、ジョクジャカルタの王宮や博物館にも被害が及んだという。人の命や生活基盤の救援がもとより第一だが、海洋国家として繁栄し、十三世紀末には元のフビライの大軍の侵攻をしのぎ切った誇り高いジャワ人の文化を何よりも尊敬するのである。

蒙古侵攻の折り、一二七八年九月、時の執権北條時宗は元の使者を鎌倉で斬つたが、ジャワのクルタナガラ王は一二八九年、來島した元の使節の顔に

刺青をして追いつ返したといわれる。

日本と東南アジア諸国は、人種や歴史、文化に深いつながりがあるが、とりわけ緋や縞などの織物や、更紗さらさや絞り染めなどの染物に、近世以降とくに大きな影響を受けた。琉球の工藝文化もその源流の多くを東南アジアに負うことはよく知られている。

さて、先日山梨県の長坂町にある平山郁夫シルクロード美術館を訪れ、平山夫妻蒐集による「金更紗と金糸織」展を観た。この蒐集のきっかけは一九八四年にインドネシアを旅行した際の、当時の同国駐在大使山崎ご夫妻の協力によるもので、もう今ではまったく手に入らない、稀少の品ばかりであった。

多くの来館者がその美しさに魅せられていたが、シルクロードの名を冠した平山コレクションが、アジアの諸民族の何千年にもわたる交流と共生、連帯の証として、これからも多くの人々に愛されつづけてほしいと願うのである。

(志賀直邦)

たくみ企画展

# 韓国の民藝展

会期 平成十八年七月二十二日(土)～八月五日(土)

七月二十三日(日)は営業いたしません。

会場 たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで

(日曜日・最終日は十七時半まで)

## 出品品目

陶磁器 白磁、染付、鉄絵、黒釉など  
 染織品 麻、木綿の草木染、刺繍などの布  
 木工品 家具、膳、盆、糸巻きなど  
 編組品 わら、萱、柳、竹などのかごやざる  
 金工品 燭台、やかん、蓋物など  
 石工品 鍋、香炉、神仙炉など



草木染め、墨染め、刺繍などの布(麻、木綿ほか)

## ドラマ「チャングムの誓い」と朝鮮の民具

十六世紀の朝鮮王朝の宮廷女官チャングムの、波瀾万丈の一生を描いた「チャングムの誓い」がいま人気です。医食同源の宮廷料理や漢方の医術、またそれに用いる器や民具も忠実に再現されて興味を惹きます。

庶民の暮らしや時代背景も織りまぜて、韓国の国柄、人柄がこれほど身近かに感じられるようになったことはかつてないことです。

しかしたくみが韓国の工藝文化と庶

民の暮らしを世に紹介したのは、じつに七十年前のことになります。昭和十一年十二月十六日、たくみは日本初の「現代朝鮮民藝品即売会」を開催しましたが、これらは柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司ら三先生が再々にわたって渡鮮し全土を廻って蒐集されたもので、たいへんな評判をよびました。その当時に惚ぼせる品々が今なお作られていることが嬉しく一見のほどおすすりめいたします。



わら、萱、柳、竹などのかごやざる。



陶磁器。膳、盆、糸巻きなどの木工品。燭台、やかんなどの金属品。

# 「アジア民族造形ネットワーク」の創設と展開 (四)

金子 量重

国際会議各国代表 「たくみ」で

”日本の民族造形を堪能“

アジアの民族造形調査を進めているうちに、文化財に対する政府援助が遺跡保存一辺倒なのに気づいた。一九九〇年六月、外務省に小倉和夫文化交流部長(現国際交流基金理事長)を訪ねた。「アジアには各地に貴重な匠の技がある。日本は近代化を急ぎ匠の技を失ったが、アジアにもその危険が迫っている。早急に対策と後継者の養成にお力を」と要請した。省内切つてのアジア通である小倉部長は会議に諮った。やがて私は外務省より『南西アジア無形文化財調査団』団長に任命される。本件の重大さに気づかれての発令に感謝。一九九三年インド、スリラン

カ、ネパール、パキスタンに赴いて現状調査を行う。どの国でも地域や民族の違いによる、父祖伝来の暮らしを支える造形技法の豊かさに心惹かれた。いずれも日本では未紹介の”もの“ばかり。この年外務省はアジア支援を含む『ユネスコ無形文化財信託基金』を設立、小倉部長との会談は実を結ぶ。その後国際会議や調査に派遣されたが、担当した主な国際会議は、

- 一、ユネスコ『無形文化財に関する国際会議』(パリ) 日本代表 93
- 二、外務省『東アジア伝統文化保存国際会議』(東京) 準備諮問委員長 94
- 三、外務省・文化庁・ユネスコ『アジア太平洋無形伝統文化国際会議』(東京) 工芸部会長 95

四、ユネスコ『アジア漆器国際ワークショップ』(ヤンゴン) コーディネーター、日本代表 96

『アジア太平洋伝統文化保存国際会議』は、一九九五年九月十八日から二十日まで外務省の会議室で行った。政府は韓国、中国、モンゴル、ベトナム、ラオス、タイ、ミャンマー、マレーシア、シンガポール、フィリピン、インドネシア、オーストラリアを招いた。私が議長を勤めた工芸部会では、各国の造形活動の現状の報告をうけた。長年積み重ねた現地での調査を踏まえて、問題点や今後の解決策や提案など、各代表の意見を聞き政府に報告。

十九日午後、三越の日本伝統工芸展に案内。華やかな会場に入った各国代表は、展示品を垣間見ただけで一箇所に固まって戸惑い気味。余りにも展覧会を意識しすぎると、それに拘束されて自由さが失われる。当然楽な気持ちで見られ、深さを感じさせるような作

品が少なくなってしまう。代表らはそれを直感したのであろう。参加者から「日本人の生活が見たい」との意見が出た。そこで急遽銀座の「たくみ」へと案内。志賀直邦社長が自ら歩いて集めた、衣、食、住、信仰、学び、遊び、芸能の造形などを紹介した。それに加えて韓国を始めアジアの「もの」も並んでいる。彼らは手に持って「もの」を熟視し、自分たちの「もの」との形や色や模様の違いに注目。その上で使い方をたずねるなど、終始和やかに歓談しながらよき交流の場となる。彼らは期待した日本の「もの」に巡り合えたと微笑んだ。各国代表の満足した顔に外務省の担当官も安堵した。

### アジアの博物館を訪ね

#### 欧米のアジア展示館を観る

中国では上海国立博物館馬承源館長にあり、この国を代表する膨大な青銅器のコレクションを見る。雲南省立博物館李子賢館長、同民族博物館謝沫華

館長を訪ね、省内26民族の生活文化を見聞の上、多様な多彩な仮面や玩具などを入手。文化大革命時の一九七六年、寺院や仏像は破壊され文化施設は閉鎖し、雲南省立博物館も扉を固く閉ざしていた。随行の中国旅行総社社員に「中国の魅力は共產主義や人民公社ではなく、民族の歴史と造形文化だ」と談判して開館にこぎつけた。これを知って江上波夫始め多くの研究者が訪れるようになる。李子賢館長とはそのとき以来交流が続いている。タイ国立博物館ゲスマンキット館長（後の文化局長）、パキスタン国立ベシヤワール博物館セライ館長からは、ガンダーラ佛の名品を見せてもらう。

各国館長の案内をうけかつ懇談したが、館の特色や個々の資料についても具体的に説明された。ネパールではシエール・バハドゥール・ディオバ首相と、無形文化財の保護や継承について語る。彼らは「日本はわが歴史や伝



ままごと道具 ミャンマー



芹沢銈介パリ展の着物の展示（1976年11月）

統文化について知って欲しい、またリーダーシップをとって、匠の技の養成の推進を望む」など意欲的だ。私自身目を開き多くを学んだ。とくに地方館が充実しており、日本にはない民族造形に数多く接した。

アジアでは古くからの民族伝統の英知を保持する、現代の「匠の技」は今集めないとなちまち消えてしまう。

「近代化」という魔の手が忍び寄っているからだ。例えばミャンマーやカンボジアやイランで見つけた、土器の「ままごと道具」はもはや手に入らない。国立博物館は眼界の狭さ故にそれを怠っている。

同時にアジアの民族造形を展示している欧米の博物館もたずねた。パリのギメや人類博物館、ベルリンやサンフランシスコのアジア博物館、さらに各大学のアジア研究も盛んで、民族造形の収集や展示もよい。オランダはライデン大学を訪ね、漢学研究院の馬大任博士の案内で、わが桃山から江戸、インドネシアの資料を拝見。さらに国立民族学博物館を訪ね各国の民族造形を見聞。大英博物館ではスミス東洋部長のご好意で、アジアの民族造形を見せてもらう。スミソニアン研究所のクネツ東洋部長とも親交を深める。夫人が韓国人なのでソウルからの帰りには、東京で合流してアジアの民族造形

について語り合った。そのほかにも、欧米の博物館は早くからアジアの造形資料に目をむけて、積極的に収集し国民への紹介は文化的先進性のあらわれ。担当官は資料に精通した専門家として、胸をはる情熱は敬服に値する。日本の博物館は大きな時の流れに追いつけないのか。彼らからアジアのリーダーであり経済力もある日本は、「印象派の絵ばかり買いあさらないで、なぜアジア資料の収集に力を入れないのか」詰問された。「日本人は見識の低さ故にいいものはアジアにはなく、西欧にしかない」と錯覚している」とい

と、彼らは顔を見合わせ肩をすくめた。「ベトナム民俗学博物館」での授章式と、シンガポール国立「アジア文明博物館」

六月、ベトナム政府の招きで同国を訪問。ベトナム民族学博物館への私の資料の贈呈式と、それに対する政府からの授章式への出席のため。フイ館長

は、東京で合流してアジアの民族造形





芹沢銈介パリ展 (1976年11月)  
会場グランパレ入口とポスター

中国とだけ銘打つてある。日本も、韓国やモンゴルは入っていない。人口の半分以上が中国人または数代前から住む華人で占める国柄のためか、これらの国を古く“東夷”や“北狄”と蔑んだ中華民族

の性格を知る手がかりとなろう。各部屋を案内されたが資料の質の高さや展示の豊かさを目を見張る。さらに特別展としてドイツ・ハンブルグ国立博物館との共催で、同館所蔵資料による「遊牧民の生活文化展」を開催中。砂漠を移動するトルコ族やモンゴル族などのテント数張と、中には多様な生活用具を展示して、遊牧民の暮らしをダイナミックに紹介している。日本を抜いてみごとに「アジア文明博物館」を開花させた姿を見たが、日本のアジア文化外交政策の稚拙さを感じる。

『セリザワ風パリを吹く』  
「二十一世紀日本を代表する造形力」とレイマリー館長

フランス国民の名において、世界第一級の作品を選んで陳列するのがパリのグラン・パレ(アーノルド館長)だ。日本人として初めて登場した「セリザワ展」は、ユニオン・ド・ミュウゼ(フランス国立美術館連合(下・マルジェ

の、寄贈についての経緯と謝辞にはじまり、ベトナム社会科学院長官ドウ・ホアイ・ナム博士から「社会科学啓発功労章」が贈られた。当日は各界の代表や日本大使館の大内参事官らが出席。ヴィエトナム族をはじめ、53の少数民族から成り立つ国だけに、本館は彼らの生活文化を具体的に紹介している。庭には諸民族の住居や水上人形芝居小屋を復元して野外展示場を構成し、立体的に観察できる優れた博物館だ。

二〇〇八年にはさらにアジア諸民族の生活文化を展示する、アジア館の建設がはじまり、二階に「金子量重記念室」が建設される。

その後二〇〇三年開館のシンガポール「アジア文明博物館」を訪問し、館長のケンソン・クウォック(郭勤遜)博士やタン・フィスム副館長と懇談した。入り口に大きなアジア地図が掲示してあるが、西、南、東南アジアは私の分類と同じだが、東北アジアはなく

と蔑んだ中華民族の性格を知る手がかりとなろう。各部屋を案内されたが資料の質の高さや展示の豊かさを目を見張る。さらに特別展としてドイツ・ハンブルグ国立博物館との共催で、同館所蔵資料による「遊牧民の生活文化展」を開催中。砂漠を移動するトルコ族やモンゴル族などのテント数張と、中には多様な生活用具を展示して、遊牧民の暮らしをダイナミックに紹介している。日本を抜いてみごとに「アジア文明博物館」を開花させた姿を見たが、日本のアジア文化外交政策の稚拙さを感じる。

リー総長」と、わが国際交流基金との共催で、一九七六年十一月から翌年三月まで開催された。一軒の美術館の主催ではなく、国を挙げての大展覧会だった。

開館の朝シャンゼリゼはじめ大通りには、藍染の「風」の文字に「Seikawa」とだけ書き、日本人とも染物とも書いてない洒落た大型ポスターが、フランス国旗を掲げたポールに掲示された。演出の上手さに芹澤や委員一同感激。私は思わず『セリザワ風バリを吹く』と叫んだ。さすが文化の都バリ、ヨー

ロッパ各界から集まった多くの人々や各紙が絶賛。西欧在住者や日本からも大勢のファンが訪れた。

一九七三年阪急での芹澤の「人と仕事展」を見聞にきた、フランス近代美術館のジャン・レイマリー館長は、陳列ケースに額をこすりつけんばかりに見入っていた。これは只者ではない。そこで「なぜ芹澤を選んだか」を尋ねた。「沈滞したフランス美術を復活させるには、もはやヨーロッパではだめだ。アジアのエネルギーを吹き込むことが重要だと考え、芹澤にたどり着い

た」といわれた。

「さすが一級の館長だ」日本人の評価の低さを補ってくれた。こんなセンスある館長は日本にはいない。欧米陶酔の文化人やねぼけた文化政策担当者は、冷水を浴びて自由な目で「もの」を見られよ。私は帰国後「セリザワ風バリを吹く」の一文を読売新聞の文化欄に書く。NHKも同名の番組を「スタジオ102」で放映。『芹澤銈介』への世界的な評価に対する国民的な関心を高めた。（つづく）

（アジア民族造形文化研究所所長）

## 色落ちする藍染木綿を手にして

吉本 力

雷蔵

先日、インターネットのあるサイトで、藍染めの手提げ袋を購入した方がおられ、手に提げて帰ると手が真っ青

になりました。

初めての藍染めの商品購入だったこともあって、知識が無く、色が落ちな

い様にするにはどうしたら良いのか、いろんな人に聞かれましたので、次のようなメールを送りました。

明治維新以前は、日本の庶民の普段着や仕事着は、木綿か麻でした。その木綿も麻も多くは、藍で染め、縞、格子又は緋に織られ、着物に仕立てられ





藍染めに用いるアイ

ていましたから、外国人が始めて日本に來た時に、藍染の着物を着た人々の美しい姿に心打たれ、「ジャパン・ブルー」と呼んで賞賛しました。

木綿は藍で染められると、元の木綿より強くなり、日本人の衣生活にはなくてはならぬものでした。当時の日本人たちは、一枚一枚の布を、とても大事にしていました。

親が着た着物を縫い直して、子供の着物にし、更に小さな布や破れた布は、重ねて綿入れのように仕立てて着たり、あるいは裂織りにして再利用し

たりしていました。また使い込んで柔らかくなった布はおむつに使われ、赤ちゃんの肌を守り、更にそのあとは雑巾になって、その身は汚れにまみれながらまわりを浄める働きをしました。

木綿はその生涯を、人様のお役に立つ働きをし続けて終えました。過去に私たち日本人は、藍染、そして木綿に、どれほどお世話になったでしょう。

藍染めは、藍草の葉を刈り取って、積み重ね、醗酵させて、すくもを作り、このすくもを藍甕に入れて発酵させ、そこへ糸や布を浸けて染めます。

明治時代中頃までは、日本各地のこの紺屋でも、すべて天然の藍のすくもだけで藍染をしていました。藍の葉には、色素成分のインディゴは数%しか含まれていません。けれども、藍草は、土中から染色力になるアルミナ、鉄分、糊分などを吸い上げているので、その力が加わって、強く糸や布に染着

します。こうして染め上がった色は、激しく使ったり、洗ったりしても、「下から色が湧く」と言われるほど洗濯の度に色が冴え、堅牢で美しい色でした。

「インディゴ」は、ドイツでは十九世紀初めから化学合成の研究がなされ、一八九七年（明治三十年）工業的に製造されるようになりました。二十世紀に入ると、たちまち、日本へも輸入されました。

先ほど述べましたように、藍の葉には、インディゴは三〜四%しか含まれていませんから、何回も何回も藍甕に浸けないと、青く染まりません。更に一度干して、また藍甕に浸けるということを繰り返し、実に五、六十回も藍甕に浸けて、ようやく紺色に染め上げることができたのでした。

しかし、化学合成でインディゴができるようになりましたから、どこの紺屋も化学合成のインディゴ（人造藍）に飛びつきました。なにしろ、藍甕中

のインディゴの濃度を一挙に高めることができませんから、五十回も六十回も藍甕に浸けなくとも十回位で、結構濃い色に見えます。

だが、これには大きな落とし穴がありました。天地自然の中において、藍色の染めには何十回も藍甕に浸けることを強いられるのは、それだけの意味があるのです。

インディゴは、水に溶けないという性質があります。醗酵によって還元され、インディゴ・ホワイトになると、水に溶けるのです。水に溶けたインディゴ・ホワイトは、糸や布の繊維の奥深くまで浸透し、藍甕から引き上げられると、空気に触れて、酸化し、再び青い色に発色します。

ところで、醗酵の力には限界がありますから、その限界を越えて藍甕に大量のインディゴを入れてしまうと、水に溶けきれないインディゴの粒子が、そのままの形で、糸や布の表面に付着

します。

これは、染まったのではなく、表面に付着しているだけです。手をつまみ、手を真つ青に汚します。手提げ袋のようなものでしたら、白いズボンやスカート

をはいて、手に提げて歩くと、たちまちズボンやスカートに擦れて、青く汚れます。そうなってしまうのも当然の結果です。

つづく  
(たたらさや主宰)

## 葡萄籠の由来記

瀧田 項一

古い昔ばなしになるが、私が師匠の許を離れて、会津の山間の地に独立してまもない頃だから昭和二十五年の頃の事である。

その頃、その山村では野良へ出る人も、山仕事に行く人も皆々思いおもしろい背負籠を背に仕事に往つたもので、その中には曲ワツパに詰つた弁当と水

と仕事に欠かせぬ道具類、その背負籠を舂むと稱うが地方によって名称は異なる。群馬では「しよい」山形では「やつかり」などなどであるが、なかには

葡萄の蔓で編んだ見事なものがある。長い歳月に使い込んで茶褐色に照り輝くばかりのものにはさすがに魅きつけられて、後を追いつけたくもなかった。荒々しい出来である、野武士の如き風貌である。手にした私は得意満面として、外出には肩に掛けて出歩いたものである。

倉敷の全国大会の時であつたらうか定かでないが、河井寛次郎先生の目にとまり、大いに歎こばれて所望され別なものを届けることになった。

しかし町の荒物屋に売っているものではない。自らが長い冬籠もりの間に作るようなものである。村中捜してようやく作ってお届け出来たのは半年も経つてのことであつた。

やがて、あちこちからの要望を得たが、なにしろ製産態勢も整わぬ有様で苦勞した、第一に材料の確保である。葡萄蔓は一年中で六月一ヶ月の間に採取せねばならない。それは水分をたっぷり含んだ時期でないと皮が剥けないのである。つまり、その時期に材料を



しよいご

確保して置かねばならないのである。つぎに作り手は皆副業であるから、注文を受けても容易に応じきれないのである。

私も駆け出し陶工の頃である。そんな或る時あげび蔓の買物籠（当時は流ししてた）の製作所を経営していた冠木氏との出会を得て、その作業所の一部でその仕事を引き受けようとの話となつた、まさに渡りに舟との譬えの如くなり、ようやく葡萄蔓の仕事も一切お委せ出来る事となつた。

手提籠の大小から始まって書類入バック、その小型のハンドバックな張り布は科布なまふを用いてファスナーを付けたり様々バリエーションに富んで来た。松本家具の池田さんからは椅子張りにと云う注文もあつたが、これはズボンの尻が擦れるとのことで大不評となつた。そんなこんな苦難の道であつたが、近ごろ葡萄蔓の籠を持つ人に出会うと、その成り立ちが思い出さ

れて懐かしいのである。

昨年の民藝館展で問題となつて議論が湧いた籠は毅然たる一線を区して落選とすべきものであつたが、相憎私は審査の席を不在にして居り些か責任を感じるのである。

民藝館の新作展はあくまで民藝美論に基づいた目で測るべき場所ので矢鱈風潮に流されてはならない。

山樵夫達の用いてた背負籠の蔓は曲つた粗野なものであつたが、極めて自然の健やかさに満ちていた。見せかけの作意に満ちたものには美はない。まるでひとに摩り寄つて媚こぼをうるようにさえおもえるのである。

さびたるは良し

さばしたるは悪し

片桐 石州

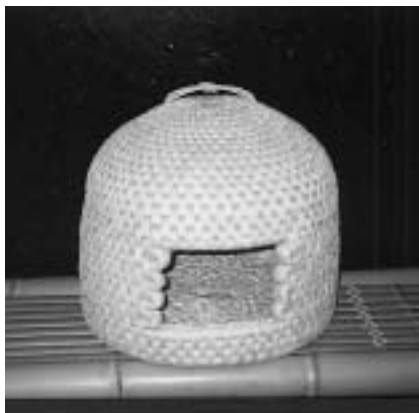
この名言を反芻すべきであらう。

（陶藝家・日本民藝協合理事）

## たくみ歳時記 藁わらの猫ちぐらと円座

猫ちぐらというのは、飼猫の寝倉のことですが、猫も犬もわらの感触や匂いを好み、冬には昔から広く用いられました。暖かく、それに結構殺菌力があるので永くもちます。

稲わらから作った用具は、縄や、むしろ、雨みの、雪沓、ぞうりなどのほかあらゆることに使われます。しかし



猫ちぐら 23,000円



円座 6,900円 (直径 45cm)  
8,000円 (直径 55cm)

猫ちぐらや円座のように、住居の板の間で使うものは藁の材料も吟味し、ていねいに作られます。形も佳く、今なお都会でも注文が絶えません。

しかし残念なことにコンバインで刈り取る現代には茎の長い良質の藁は少く、作り手も高齢化して数が出来ません。それでもたくみでは、一年をとおしてご注文を承るよう心掛けております。

## あとがき

京都や鎌倉などで名ある古刹の梵鐘に刻まれた文字を見ると、終りに「鑄物師大工某々造之」と記されていることがある。いもじのたくみ、と読むが鑄造の佛や鐘を造る当時のハイテク集団の棟梁の名であろう。

古来わが国では造営や器物など扱う役所を内匠寮とよび、秀れた仕事、上手な職人の技を「匠の技」といった。

昭和のはじめ、柳宗悦は鳥取と東京銀座に相ついでできた手仕事の店の名を「たくみ」と名付けた。店のマークは丸のなかに「工」の字を配したもので、柳の同志芹沢銈介の意匠による。

いま町に、私たちの周囲にどれほどの本当の「たくみの技」が見られるのか。私たちの使命の重さを感じないわけにはいかない。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八ー四ー二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三ー三五七ー二〇一七

FAX 〇三ー三五七ー二一六九

振替 〇〇一〇一ー二一三五六五九

定価 六〇円(税込)